

「スワヒリ化」

——バントゥのアラブ化について——

和 崎 洋 一*

Swahilization——Types of Arabization in Bantu Peoples——

Yoichi WAZAKI*

- 目次：1. まえがき……「スワヒリ化」
 2. 「スワヒリ」という用語について
 3. 分析・考察の方法……アラブ語がちりばめられたバントゥ語
 4. 事例の考察
 4. 1. 家・家財道具について
 4. 2. 動物名について
 4. 3. 身体名称について
 4. 4. 時について
 4. 5. 数について
 5. あとがき……問題の展望

1. まえがき……「スワヒリ化」

はじめに筆者の「スワヒリ化」に関する考えを要約すると次のようになる：

- 1) サハラ以南のアフリカ大陸にバントゥ語（文化）が展開した。
- 2) 東アフリカの海岸でバントゥ語（土着文化）がアラブ語（外来文化）に出会った。
- 3) そこではアラブの混血と文化の受容によって「スワヒリ*」が成立した。即ち「スワヒリ化」の第一段階 [staarabika (ku-)**-I] は海岸バントゥのアラブ化で始まった。
- 4) このバントゥのアラブ化は「スワヒリ」による「アラブ文明の道具化」によって進行した。
- 5) この「文明の道具化」とは核になる文明の要素を周辺（文明のフロンティア）が主体的に選

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

択する事である（三木：1984）。また人類進化的な意味で、「道具化」とはチンパンジーが棒や石を手にとって道具に使うことの様に「環境（棒や石）の身体化」と考えることも出来るであろう。

- 6) その結果「スワヒリ」ではアラブ化はバントゥの構造化（内的充実と外的展開）であり、同時にこれが「スワヒリのバントゥ化」（日野：1980）の条件であると筆者は考える。
- 7) この条件の上で、①アラブ・スワヒリ商人の交易活動とイスラムの布教活動、及び②「サバンナの住民のテンベア」（和崎：1980）による東アフリカの「スワヒリ化」が進行した。これが「スワヒリ化」の第二段階 [staarabika (ku-) - II] である。
- 8) 即ち、これまで筆者が東アフリカの「スワヒリ化」で述べて来た「サバンナの自己運動」とは、「スワヒリ化」が「アラブの代行者でないバントゥ民のスワヒリ」の成立と併せて、「サバンナの住民の行動（テンベア）」を重視した考えを述べているものである。
- 9) 尚、このような考えは、13世紀に旧大陸に成立した七つの文明のなかに、イスラム文明〔西・北アフリカ〕に対して〔サハラ以南のアフリカ〕を「強烈な個性」の文明とする歴史観（三木：1984）と、サハラ以南の「黒人アフリカの歴史世界」が長期に亙る外来文化の受容とアフリカらしさの維持、あるいはその無造作な共存の文化であるとする文化観（川田：1987）とに触発されて出来たものである。
- 10) 更に現在タンザニアを核として展開する「スワヒリ化」及び欧米のアフリカ人社会に於ける「スワヒリ運動」は「スワヒリ化」の第三段階 [staarabika (ku-) - III] である。

*注) 「スワヒリ」という表現については次章〔2〕で触れる。

* * 注) staarabika (ku-) のスワヒリ語 (Sw) ・英語 (E) 訳を記す。ここで [J-Sw] [J-E] [SA] [Rech] はそれぞれ次のものを示す。(ku-) という標記は動詞の不定詞であり、単語の後に付けて筆者はそれが「動詞」であることを示す（2章、注参照）。

[J-Sw] : F. Johnson (1935) Kamusi ya Kiswahili (スワヒリ語) .

[J-E] : do. (1939) A Standard Swahili-English Dictionary.

[SA] : ダルエスサラーム大学編 (1981) Kamusi ya Kiswahili Sanifu (スワヒリ語) .

[Rech] : Charles W. Rechenback (1967) Swahili-English Dictionary.

(Sw)-1 [J-Sw] kutamaduni.

-2 ["] kupata elimu, kuwa na maarifa, kuwa na habari ya desturi zifaazo na kuzifuata.

-3 [SA] kuwa na vitendo, tabia na mwendo unaolingana na maadili ya jamii.

(E)-1 [J-E] get understanding, be wise, know about things, be civilized.

-2 [Rech] (originally) be Arabized, live according to Arab customs.

-3 ["] (fig.) adopt Western/European ways, be civilized; show good manners/breeding.

「スワヒリ化」—サバンナの自己運動—について、筆者の立場と展望を述べたが、本論文はバントゥのアラブ化の具体例を取り上げて分析・考察し、上述の考えを支える基礎資料をまとめて示す事によって前論文（1988）に続けるのが目的である。尤も、筆者は前論文とこの基礎資料の

分析・考察を併せて、改めて稿をまとめ、それによって私論にたいする論評を得る必要があると考えていたがその余裕がなく、本稿単独では行き届かない点を承知の上で「バントゥのアラブ化」あるいは「アラブ文明の道具化」に絞って基礎資料を例示し、その分析・考察を試みることにする。従って「サバンナの自己運動」という問題に言及する事は次稿にゆずる事にしたい。

2. 「スワヒリ」という用語について：

前論文の後記の注(和崎：1988. p. 10)に記した通り、「スワヒリ」という用語について紀要編集者から「これはその文脈によってスワヒリ人・語・地域・社会・文化などと記すことが正確な表現ではないか」という指摘があった。その時筆者は「その指摘には同感であり稿の途上で指摘のように表現に出来るだけ添う」と共に、いっぽうで「スワヒリとは何か」というように、一人・一語・一文化などと限定しないほうがよい場合があり、今後より正確な表現を検討したい」と述べるに止めていた。

しかしその後、筆者はこの点は重要な意味もっていることに気付いたので、まずこの問題に触れておきたい。即ち、スワヒリ学に関わるものが「スワヒリ」という用語になじんでいる結果としてその不正確さを見逃し許容して来たのではなく、逆にスワヒリ語において限定する語を付けない表現(スワヒリと共にバントゥも同様である)のもっている「不正確さ」の積極的な意味についてである。そしてこの考えは言語学に立つものではなく、筆者のスワヒリ語圏における文化人類学調査生活の中で作り上げた「スワヒリ」感覚からまとめたものであって、筆者の不勉強から言語学上の諸説に言及できない。(この点について教示戴ければ幸いと思っている)

それはスワヒリ語の名詞の構造*によるもので、次の対訳で考えることにする。

スワヒリ	Swahili
スワヒリ人	M-swahili
スワヒリ語	Ki-swahili
スワヒリ地域(国)	U-swahili 等。

これはスワヒリ語では接頭辞 [M-,Ki-,U-] が日本語の「人、語、国」を表すことが解る。しかし [M-,Ki-,U-] は接頭辞であり [Swahili] に付けて初めて意味をもつものであって、それ自体独立して意味を持たない。これに対して日本語では「人・語・国」はそれ自体が意味を持つ名詞である。この点に注目して考えると、「スワヒリ」に「人」を付けて「スワヒリ人」を表すことと、[M-] に [Swahili] を続けて「スワヒリ人」を表すこととの違いに気が付くのである。このちがいを筆者は次のように考える。即ち、スワヒリ語の名詞の接頭辞の役割は、日本語のように「スワヒリ」に「人」の意味を付け加えるのではなくて、接頭辞 [M-] は [Swahili] の持っている意味全体のなかから「人」の意味を引き出すことである。言い換えれば「スワヒリ」という表現は(その文脈の中で)スワヒリ人にもスワヒリ語にもなり、また適当に複合した(曖昧だが適切でありかつ包括的な)意味を持つ、と考える。そうすれば日本語の文脈の中では限定する語のな

い「不正確さ」が、スワヒリ語の文脈では適切でより包括的である事が起こると考えられるのであろう。この観点から「日本」という表現の持つ意味と対比して、「スワヒリ」という表現の適切さを改めて主張しておきたい。こう言っても、これによって限定する語を付けないのが良いということではなく、当然「～人・語・国」を付けることが必要な場合があることは勿論である。

尚、間に触れた「名詞が総て接頭辞によってクラス分けされること」と「アラブ化」との問題は、本論では触れる余裕がないが、2・3の興味深い問題があることを指摘するに止めてこの項を終わりたい。

*注) 直接論旨に関係は無いが、スワヒリ語の名詞のクラス(単数・複数)の一覧表を示しておく。

クラス	名詞(単 複)	メモ	:[参考]本文中の表記
M-WA クラス	m-tu wa-tu 人	M-地名～国人	mtu,wa-
M-MI	m-ti mi-ti 木		:mti,mi-
N	n-jia n-jia 道		:njia,-
KI-VI	ki-tu vi-tu 物	KI-地名～国語	kitu,vi-
MA	yai ma-yai 卵		:yai,ma-
U	u-devu n-devu 髭	U-地名～国	:udevu,n-
PA	mahali 所	このクラスの名詞はこの一語のみ。	
KU	ku-soma 読むこと	ku-は動詞の不定詞。:soma(ku-)	

3. 分析・考察の方法:

前章(1)でのべたように、本論はバントゥのアラブ化を現行スワヒリ語を資料にして考えようとするものである。そのために現行スワヒリ語の辞書を取り上げその全体を考察の対象とした。主な辞書はF. Johnson (1939, Swahili-English.) および (1935, Swahili-Swahili) で、必要に応じて和崎 (1980), TAUKI (1981), Rechenback (1967) を参照した。また非バントゥ語(アラブ・ペルシャ・ヒンディ・ポルトガル・英・仏)はF. Johnson (1939) の記載に従った。この記載には現在進んでいるバントゥ諸語の調査研究から誤りが指摘されている点もあるが、本論の考察の基本に関わりがないと判断して考察を進めた(しかし今までに研究者の指摘のあったものは改め、また今後本論で筆者の考察の本質に関わるものが出来れば、当然考えなおすことにやぶさかではない)。また筆者は考察の事例とする対象をF. Johnson (1st. ed. 1935, 及び1939) に限定することによって(スワヒリ言語学に携らない)筆者の任意の選択による不徹底を避けることが重要である、と筆者は考えている。

スワヒリ語はアラブ語という〈星〉がきらめくバントゥ語という〈夜空〉である。あるいは様々な鉱物〈バントゥ語・非バントゥ語〉を含んだ一つの鉱石である。夜空を眺めていれば星座が見えて来、惑星が回り彗星が現れ、流れ星が流れる。また鉱石をよく観察すればその鉱物の色や形に気が付く。更に鉱石の薄片標本(プレパラート)を作って見れば、もっとよく鉱物や一つの鉱

石の構造が解かるであろう。筆者がここで「バントゥのアラブ化」[staarabika (ku-)] を考えるために歴史文献や辞書を渉猟せず一つのスワヒリ辞書 (F. Johnson, 1935, 1939) に限定して採りあげるのは、筆者の比喩に従えば次のように表現出来るだろう。即ち、何世紀に亘って様々な異文化 (特にアラブ文化) との接触によって出来上がり尚現在も流動して止まないスワヒリ語の全体は一つの〈鉱石〉であり、1935年、1939年に F. Johnson がまとめたスワヒリ語辞典はその〈鉱石〉の〈プレパラート〉の一枚である。この現行スワヒリ語という〈プレパラート〉に拠って筆者はスワヒリ語〈鉱石〉の中に“ちりばめられた”〈鉱物〉バントゥ語・アラブ語の考察を試みようとするものである。比喩抜きで言えば、バントゥのアラブ化の永い歴史の一断面が Johnson の辞書 [1930年代のスワヒリ語] に現れていると考え、その中にあるアラブ語とバントゥ語とを比較して、「アラブ化」の諸相を引き出して見ようということが筆者の取ろうとしている方法である。

ここで、もう一つ筆者の取り上げた方法はスワヒリ語に拠る説明 (F. Johnson; 1935) に立って考えることである。筆者が「アラブ化」を考えて行く中でこのことの重要性に気が付いたのは、〈staarabika (ku-)〉の英語訳とスワヒリ語訳との重要な違いに気が付いたからである。まえがき (1) で注記したこの語の意味をここで整理して見よう。即ち;

スワヒリ語訳 (注: Sw. 1, 2, 3): 伝承する, 自分が従って行動すべき集団の習慣の知識を得る。

英語訳 (注: E. 1, 2, 3): 文明化する, 即ち (始めは) アラブ化する, (現在は) 西欧化する。

これで解るように〈staarabika (ku-)〉[アラブ化する] は、アラブ文明 (続いて西欧文明) の接触によるバントゥ民の外的変容であることと共に、より重要なことは、この語のスワヒリ語訳がバントゥ民にとって「アラブ化」はその内的充実であったことを示している点である。これはスワヒリ語のスワヒリ語訳に英訳では見逃してしまう意味を見いだす例*の一つであって、筆者は本論で「アラブ化」と言うのは、上のスワヒリ語の説明の示すようにバントゥの内的充実を意味するものである。この「バントゥの内的充実」を別の面から解釈すれば、「アラブ化」はアラブによる一方的なバントゥのアラブ化ではなくて、バントゥ (ひいてはスワヒリ) による主体的なアラブ語 (文明) の選択である、ということができよう。これが「まえがき」の「アラブ文明の道具化」であり、そのような選択の在り方を現行スワヒリ語の事例について示すのが、本論の目的である。

*注) 例えば tembea (ku-) は、筆者がはじめての東アフリカ調査 (1963~64) 以来取り上げている言葉である (和崎, 1980, p. 673)。出典 [J-Sw] [J-E] [SA] [Rech] はまえがき (**注) 参照。

(Sw)-1 [J-Sw] Kuenda mahali, hasa kwa miguu.

-2 ["] Kuzunguka.

-3 ["] Kuhangaika kwa uasherati.

-4 [SA] Kuenda mahali kwa makusudi ya kuona mtu au jambo n. k.

- 5 ["] Kufanya jinaa.

(E)-1 [J-E] go about, take a walk, stroll, wander, take exercise, go on a tour...usu. for pleasure, but also of a business round.

- 2 [Rech] [J-E] と同じ。

テンペアについては、ここでは上記の (Sw)-1 の訳「ある所へ行く、特に二本足によって」が、筆者には重要に思えることだけを述べておこう。

4. 事例の考察

ここで取り上げる考察の事例は1) 家・家財道具, 2) 獣・鳥 (和崎:1985), 3) 身体名称, 4) 時, 5) 数である。これらは総て名詞で、物事に関するものであるが、本論ではこれらの名詞によって、まず「アラブ文明の道具化過程」を考える手掛かりを求めるための作業として、バントゥのアラブ語にたいする対応の在り方を分類・整理する。つまり本論はバントゥの対応の分類学・形態論の手初めであり、今後これに6) 人を取り囲む空間・社会、及び7) 行動・価値観に関する名詞・形容詞・動詞等の事例を加えて、「バントゥ (スワヒリ) によるアラブ文明の道具化過程」の構図を提示することによって、筆者は「スワヒリ化」のダイナミックスとして「サバンナの自己運動」を取り上げ、前論文 (1988) に掲げた「スワヒリ化」の問題をまとめる考えである。従って本論では「サバンナの自己運動」に触れることはしない、あくまで「アラブ語 (文化) にたいするバントゥの対応」の形態論であることを始めに断っておく。

本論で筆者が取る方法は「現行スワヒリ語を〈鉱石〉にたとえ、その〈鉱石〉のプレパラートを顕微鏡で調べ、その中にちりばめられている〈鉱物〉アラブ語 (非バントゥ語)・バントゥ語の組織・構造を調べる」という考え方に立っている。従って、考察の事例は総て「家」「動物」「身体」のような具体的な物や、「数」「時」のような抽象的な概念を一つのまとまった〈構造物〉として取り上げる。そして筆者は、その〈構造〉をバントゥ (スワヒリ) 民の意識の構造としてとらえて、具体的な物であれ抽象的な概念であれ、その中に組み込まれたアラブ語 (非バントゥ語) が、その構造の中でバントゥ (スワヒリ) 民の意識とどれだけ連続性をもっているかを分析考察して、「バントゥのアラブ化」の一つの側面を明らかにしたい。

4.1. 家・家財道具について：

〈構造物〉として「家 nyumba」と「家財道具 vyombo」を取り上げる。(図1, 表1) [本論文中でスワヒリ語の語源は無印で (バントゥ語), ◆印は (アラブ・ペルシア・ヒンディ・ポルトガル語), ●印は (英仏語) を表す。また語源は F. Johnson (1939) A Standard Swahili-English Dictionary に拠る。]

この中で家の間取りと構造の主な名前を取り出すと次のようになる。

- 間取り： chumba 部屋(特に居間)。
 ◆sebule 客間。
 jikoni 台所。
 choo / ◆msala 便所。
 ◆bafu 浴室。
 ◆ghala / ◆bohari / ●stoo 納屋。
 ua (囲った)中庭。
 ◆boma 家の囲い, 屋敷。
 ◆baraza 家の前の広場。
 構造： nyumba 家(伝統的な草屋根土壁)。
 ukuta 壁。
 mlango 戸, 入り口。
 ◆dirisha 窓。
 paa 屋根。
 majengo 建物, 特に煉瓦石造りの家。

この中から「バントゥのアラブ化」の手掛かりを拾いあげてみる。

(1) 戸 [mlango] と窓 [◆dirisha] :

戸と窓という組み合わせで考えて、これらが別々にバントゥ語とアラブ語であるのは何故か。それは窓がなかった(また在っても明かり取りの小穴であった) 伝統的な戸・戸口は在った。そこにアラブ語の窓を取り入れた。

(2) 戸前の広場 [◆baraza], 客間 [◆sebule], 浴室 [◆bafu] :

これらはアラブ文化の直輸入である。尤も戸前の広場 [◆baraza] は伝統的な世間話(情報交換)の場であったであろうから、アラブ語でその空間の概念が固まったと考える。また、客間 [◆sebule], 浴室 [◆bafu] も同様のと考えられる。

納屋 [◆ghala, ◆bohari, ●stoo], 屋敷 [◆boma] も同様に外来の文化によってその空間の概念が固まったと考える。なお [●stoo] は英語で歴史的には新しいものである。

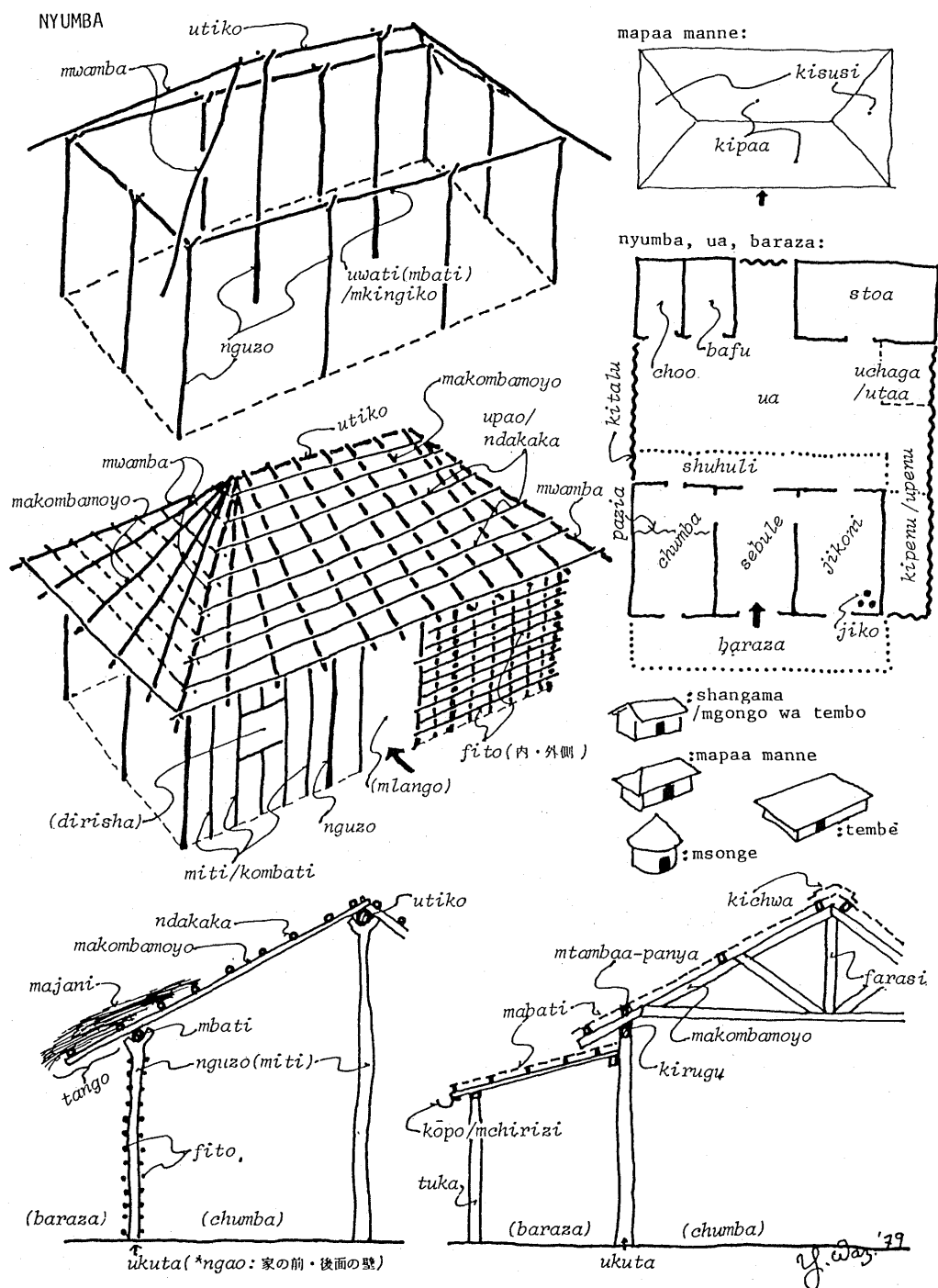
(3) 便所 [choo, ◆msala] :

これはバントゥ語とアラブ語との併用である。これは時と場合によって用語を使い分けている。ダルエスサラーム国際空港では〈◆msala〉で、田舎の安宿では〈choo〉であった。

(4) 家 [nyumba, majengo] :

〈nyumba〉は家の総称であるが、この場合は伝統的な土壁草ぶき家を意味する。それに対して〈majengo〉は建造物という意味と共に、ここでは〈nyumba〉に対してアラブ式の建物(家)——煉瓦 [◆matofari]・石 [mawe] 造り, 石灰 [◆chaki] の白壁, 二階屋 [◆ghorofa], 平屋根 [◆dari, ◆sakafu] ——をいう。ともにバントゥ語であるが、その構造に立ち入ればアラブ式の家にはアラブの持ち込んだ文化が取り入れられている。

図 1. スワヒリの家(nyumba): (和崎・原図, 1980)



(5) 様々な家財道具 [vyombo] :

家の中の様々な道具を見れば、そこに取り入れられた非バントゥ語は歴史の流れの中でその時々にはバントゥ民が必要として来たものであることが解る。

ここでまず、一つのカテゴリイ(家・家財道具)の中に「ちりばめられている」アラブ語からバントゥ民がアラブ文化(異文化)にどのように対応しているかを分類してみる。

- ① バントゥに無かったものをバントゥ語に「付け足す」。**【付け足し】**の対応。

例：浴室 [◆bafu], 様々な家財道具など。

- ② バントゥに在ったもの(語)が消えて、あるいはバントゥ文化に在ったが名前が無かったものがアラブ語に「乗り換える」。**【乗り換え】**の対応。

例：窓 [◆darisha], 広場 [◆baraza], 客間 [◆sebule]。

- ③ バントゥ語とアラブ語とを「使い分ける」。**【使い分け】**の対応。

例：便所 [choo, ◆msala]。

表1. 家・家財道具[Nyumba, Vyombo] :

(注) 表中◆印は アラブ・ペルシヤ・ヒンディ語, (ポルトガル語も含む), ●印, 英・仏語, 無印, バントゥ語の起源を示す。(以下, 本論中同様)

A) 屋敷・間取り

nyumba,- 家。

chumba, vy- 部屋(特に居間)。

◆sebule,- 客間(三間取りの中の間)。

jikoni,- 台所(竈がある, 女の間)。

jiko, meko/jifya, ma- かまど石。

jiko/mafya/mafiga 竈(石三個)。

choo, vy-/◆msala, mi-便所。

◆bafu, ma- 風呂場・浴室, 浴槽。

◆ghala,-/◆bohari,-/●stoo,- 納屋・倉庫。

uchaga/utaa (U) 穀物乾燥小屋(高床)。

upenu (U)/kipenu, vi- (横の壁の)差し掛け小屋。

shuhuli,- (後ろの壁の)差し掛け小屋。

ukuta, kuta 壁。

kitalu, vi- 庭囲い, 垣根。

ua, nyua/ugo, nyugo (囲った)中庭。

ua wa miti/nyasi/makuti/mabua. 木, あしの葉, ヤシの葉, トウモロコシなどの茎でつくった垣根の中庭。

boma, ma- 家の囲い, 塀, 屋敷。

◆baraza, ma- 家の前の広場。

[vyombo/mizigo 家財道具]

- ◆taa,- ランプ。
- koroboi,- 灯心ランプ。
- ◆meza,- 机。
- mafuta ya ◆taa 灯油。
- kiti, vi- 腰掛け, 椅子。
- kitanda, vi- 寝台。
- mto, mi- 枕。
- ◆takia, ma- 枕(大きい)。
- foronya,- 枕カバー。
- mkeka, mi-/◆jamvi, ma- ござ。
- ◆godoro, ma- マットレス。
- ◆shuka la kitanda, ma- シーツ。
- shiti,- シーツ。
- blanketi, ma- 毛布。
- kitambaa, vi- 布(一般)。
- mvungu, mi- 寝台の下(収納空間)。
- kabati, ma- (食器)戸棚。
- ◆almari,-/●drou,- (引き出し)タンス。
- mtoto/◆saraka 引き出し。
- ◆kasha, ma- (アラブ風)木箱。
- ◆sanduku, ma- (一般に)箱, トランク。
- boksi,- ダンボール箱。
- ◆jamvi, ma- ござ(粗, 長方形, 客用)。
- ◆msala, mi- ござ(長円形, 礼拝用)。
- mkeka, mi- ござ(長方形, 日用)。
- ◆pazia, ma- カーテン。
- chombo, vy- 食器・道具類。

- nguo,- 着物, 服(一般)。
- kanga,- カンガ(主に婦人用, 布地)。
- kitenge, vi- キテンゲ(")。
- gauni, ma- ワンピース。
- ◆kanzu,- カンズ(主に男用)。
- koti, ma- 背広(カンズ等の上に)。
- ◆shuka,-/ma- 腰布(男用)。
- ◆kikoi, vi- 房飾り・模様のある腰布(男)。
- shati, ma- シャツ。
- utepe wa shingoni/●tai ネクタイ。
- vesti,- 肌着のシャツ。
- ◆chupi,- パンティ。
- skati,- スカート。
- ◆suruali,- 長ズボン。

kaputula,- 半ズボン。
 ukanda, kanda (ズボンの)バンド。
 (?)スカートの下着。
 ●soksi,- 靴下(ソックス)。
 kiatu, vi- 履物[草履・靴]。
 ◆kofia,- 帽子(一般)。
 ushanga, shanga 首飾り(ビーズ)。
 mkufu, mi- 首飾り(鎖)。
 ◆bangili,- 腕輪。
 pete, ma- 耳飾り。
 pete, ma- 指輪。
 udodi, dodi 手・足首に巻く細い紐。

kisu, vi- ナイフ(刃物一般), 小刀。
 upanga, panga バンガ。
 ◆mkasi, mi- / ◆makasi (MA) 鋏。
 kikombe, vi- 茶碗。
 ◆bilauri,- (ガラスの)コップ。
 ●glasi,- "。
 ◆sahani,- 皿。
 bunguu,- / kibunguu, vi- 皿(陶器)。
 ◆bakuli,- / ma- 椀。
 bia,- / kibia, vi- 椀(陶器)。
 kijiko, vi- 匙, スプーン。
 mwiko, mi- しゃもじ。
 kata,- ひしゃく(深, 大)。
 upawa, pawa " (浅, 小)。
 kawa,- 食物の皿覆い(草編み)。
 ◆sufuria,- / ma- 鍋, 釜。
 ◆kopo, ma- (缶の)コップ。
 ungo, ma- / ny- (浅い)箆・箕(み)。
 kaango,- フライパン(陶器)。
 chungu, vy- 鉢・壺。
 mtungi, mi- [◆balasi, ma- / ◆kasiki, ma- / ◆kuzi, ma- / ◆gudulia,-] 水瓶。
 (大小・形・用途が違う)
 kibuyu, vi- 瓢箪(乳・酒)。
 kipeyu, vi- 瓢箪半分の器。
 kipekecho, vi- ウガリの攪拌棒。
 boi,- 鍋支えの棒(足で押さえる)。
 ◆kiberiti, vi- マッチ, ライター。
 ukuni, kuni まき・薪。
 ●tangi, ma- タンク(貯水, 酒仕込み)
 kikapu, vi- 籠。

mfuko, mi- 袋, 鞆。

◆kamba, - 紐, つな。

◆gunia, ma- 麻袋(穀物・豆など)。[以下日常の計量単位となる]

◆debe, ma- (4 ガロンの)空き缶。

●galoni, ma- (1 ガロンの) ”。

chupa, -/ma- (ソーダ・ビールの)壺。

◆kopo, ma- (缶詰の)空き缶。

B) 構造・材料

nyumba, - 家(一般に), (特に)草ぶき・土壁の家。

shangama, - 切妻造り。

mapaa mawili ”。

mgongo wa tembo ”。

mapaa manne 寄棟造り。

msonge, mi- 円錐形の屋根造り。

tembe, - 方形平屋根造り(牧畜民)。

jengo, ma- 建物, (特に)ビルディング。

jenga (ku-) 建築する(nyumbaを)。

aka (ku-) ” (majengoを)。

unda (ku-) 建造する(木造船を)。

ukuta, kuta 壁。

udongo (U) 土。

●chaki, - 石灰。

mti, mi- 材木。

bao, ma-/ubao, m- 板。

nguzo, - (主要な)太い柱。

kombati, - (間にいれる)細い柱。

ufito, fito 細い横材(柱をつなぐ)。

uwati, mbati 梁・桁。

mkingiko, mi- ”。

majani (MA) (草木の)葉。[nyasi 葦, makuti ヤシ, mabua トウモロコシなどの茎]

◆kamba, - 紐・縄。(用材には一切針を使わない。特定の草や木の皮を裂いて使う)

◆msumari, mi- 釘。

mlango, mi- 戸, 扉, (家の)入り口。

kizingiti, vi-/kirimba, vi- 上下の杵材。

mwimo, mi-/◆mhimili, mi- 左右の杵材。

ubao, m- 板。

kipini, vi- ハンドル。

kitasa, vi- 錠(扉・箱の)。

◆kufuli, -/ma- 錠前。

ufunguo, funguo 鍵。

◆pata, -/◆bawaba, - ちょうつがい。

◆dirisha, ma- 窓。

kioo, vi- ガラス。

paa, ma- 屋根。

(草屋根の構造)

kipaa, vi- 前後の屋根。

kisusi, vi- 左右の屋根。

majani (MA) 屋根草。

◆bati, ma- トタン(の浪板)。

utiko, ma- 棟木, または棟に葺く草。

mwamba, mi- 寄棟の材(隅の四本)。

makombamoyo (MA) 椽(たるき)。

upao, pao たるきの上に結ぶ横材。

ndakaka, - " 。

(トタン屋根の構造)

kichwa, vi- 棟にかぶせるトタン材。

◆bati, ma- トタンの浪板。

mtambaa-panya トタン屋根を打ち付ける横材。

makombamoyo (MA) たるき。

◆farasi, - 束。

kirugu, vi- 敷桁。

matungizi (MA) (?)

◆kopo, ma- 樋(どい)。

mchirizi, mi- " 。

majengo (MA) ビルディング。(nyumba に対して)

◆tofari, ma- 煉瓦。

jiwe, mawe 石。

kokoto, ma- 小石, 礫。

changarawe, - 小石, 砂利。

mchanga, (mi-) 砂。

udongo ulaya セメント。

◆dari, - 天井, 階。平屋根。

◆orofa, - (二)階, 階上。

◆ghorofa, - " 。

◆sakafu, - たたきの床, コンクリートの平屋根。

◆daraja, ma- 階段。

ngazi, - はしご, 階段。

msingi, mi- 基礎・土台(の為の溝)。

4. 2. 動物名について:

続いて, 動物 [mnyama] の獣 [mnyama] と鳥 [ndege] について見てみよう。

獣(野生動物・家畜)の名前(102個体)は表2-4に載せたが, 鳥(315個体)は繁雑を避けて考察の対象となるもの(11個体)だけ取り上げた。(鳥名の一覧表は和崎(1985, 1986)参照)ここで獣・鳥の個体数を示す(表2-1)。この中の野生動物(2), 家畜(2), 鳥(11)のラブ名・バントゥ名を挙げる(表2-2)。

表 2-1: 獣・鳥の個体数。

内訳		(A)	(B)
獣: 野生動物	96	20	76(2)
家畜	6	—	6(2)
鳥:	315	170(5)	145(6)

注) (A): F. Johnson (1939) に記載なし, M. Maimu (1982) に拠る。

(B): 〃 に記載あり。

表中の() はアラブ(非バントウ)語を示す。

表 2-2(a): 獣(野生動物と家畜)

[野生動物]

ハイラックス ◆wibari, -kwanga, -/pimbi, -/pelele/-

かば ◆kiboko, vi- (バントウ語無し)

「家畜」

馬 ◆farasi, - ()

らくだ ◆ngamiya, - ()

(付) 同種または類似種のスワヒリ語

野鼠 buku, ma- / ndezi, -

ひょう chui, - / nundu, -

ハイエナ fisi, - / kingugwa, vi- / simba marara, - / shundwa, -

りす kidiri, - / kindi, -

ダイカー kiduku, vi- / funo, -

兎 kitungule, vi- / sungura, -

かもしか(中) kulungu, - / pongo, - / mbawala, -

かもしか(総称) malu, - / swala, -

バッファロー mbogo, - / nyati, -

エランド mbungu, - / pofu, -

(さるの一種) ngedere, - / tumbili, -

はちみつあなぐま nyegere, - / nongwa, -

かもしか(小) paa, - / suni, -

象 tembo, - / ndovu, -

表 2-2(b): 鳥 [ndege, - : 非バントウ語源の鳥名, F. Johnson (1939) に記載があるもの]

ハタオリドリ ◆bintichuma, - *Ploceus* spp.

mnaana, - *Ploceus* spp.

エボシドリ ◆dura, - *Musophagidae*

オウム, インコ ◆kasuku, - *Psittacus* spp.

ヤツガシラ ◆hudhud, - *Upupa* sp.

Jogoo-mwitu, ma- / kwembe, - *Upupidae*

カワセミ類 ◆kisharifu, vi- / msharifu, wa- *Ispidina pikta*

chopoa, - / mvuvi, wa- *Alcedinidae*

チュウビ類 ◆koho, - *Polyboroides* sp.

kikozi, vi- *Circus* spp.

ハゲワシ類 ◆mangisi, - *Trigonocephalus* sp.

	tai,-/tumbusi,-	Aegypiidae
ツバメ類	◆mbayuwayu,-	Apodidae
	kijumbamshale, vi-	
ダチョウ	◆mbuni,-	<i>Struthio camelus</i>
クジャク	◆tausi,-/ kibibi, vi-	
カエデチョウ類	◆zawaridi,-	<i>Pytilia melba</i>
	mshigi,-	Estrildidae

この名前について考えて見る。

1) 獣(野生動物) :

ハイラックス [kwanga, pimbi, pelele, ◆wibari] はアラブ語とバントゥ語の併用, つまり「使い分け」である。本論では原則としてアラブ語にたいする対応の理由に立ち入ることはしないが, このハイラックスについて次のことが考えられる。ハイラックスはアラブ中東の乾燥地帯の動物である。そこから来たアラブ人たちがこの動物に自分の国の思いを掛けたのではないだろうか。

カバ [◆kiboko]。カバは東アフリカのサバンナの代表的な大動物である。そのカバが (F. Johnson, 1939) にバントゥ語の名前を載せていないのは何故だろう。そのカバに何故アラブ語の名前が付いたのか。とにかく「付け足し」とは考えにくい。これは部族語との照合によって (ILCAA, 1987, 1989), バントゥ語からアラブ語への「乗り換え」であった。このことは後のダチョウ [◆mbuni] の中で述べる。

2) 獣(家畜) :

ウマ [◆farasi] とラクダ [◆ngamia] はアラブ原産動物で東アフリカにはいなかった。つまり明白な「付け足し」である。

3) 獣(複数のバントゥ語のある野生動物) :

これら14の野生動物のバントゥ名は厳密に同種ではなく類似種を含んでいる(筆者が個々に同定した訳ではない)。このようなバントゥ語の併用は様々な地域(部族語)によるものである。例えばゾウ [tembo, ndovu] は前者が内陸で, 後者が海岸地方の名称である。「使い分け」

4) 鳥: (表2-2(b) 参照)

この11種の鳥の名前には(1) アラブ・バントゥ名の併用, と(2) アラブ名のみとがある。

(1) アラブ・バントゥ名の併用には次の二つが考えられる。

(1-a) もともとバントゥ名があったが, アラブ名が加わったもの—「使い分け」の場合: チュウヒ類 [kikozi, ◆koho]

ハゲワシ類 [tai, tumbusi, ◆mangisi]

ツバメ類 [kijumbamshale, ◆mbayuwayu]。

(1-b) アラブ名が入った後でスワヒリ名が名付けられたと考えられる場合:

カワセミ類 [◆kisharifu, chopoa, mvuvi]

ヤツガシラ類 [◆hudhud, jogoo-mwitu]

クジャク類 [◆tausi, kibibi]

この場合も「使い分け」の変形とする。

(2) アラブ名の場合：

エボシドリ・オウム・インコ類 [◆dura, ◆kasuku]

ダチョウ類 [◆mbuni]

オウム・インコ類は明らかにアラブが持ち込んだものであろう。これは「付け足し」である。しかしダチョウ [◆mbuni] がアラブの持ち込んだ「付け足し」とは、カバの場合と同様の理由で考えにくい。そこでカバとダチョウについて改めて考えて見よう。

5) カバ [◆kiboko] とダチョウ [◆mbuni] について：

この場合「付け足し」と考えるのは、F. Johnson (1939) に他のバントゥ語の記載が無いからである。だから、F. Johnson (1939) に記載が無くても、もし東アフリカのバンドゥ語（部族語）にこれらがあれば、元もとその文化にその概念があったのだから、理由は別にして「乗り換え」である。そう考えて手元の Bantu Vocabulary (ILCAA, 1987, 1989) によって次の結果を得た。

表2-3：動物名の部族語：アラブ(非バントゥ)語の2～3の動物名について。

部族名*	カバ : ◆kiboko, vi-	ダチョウ ◆mbuni,-	魚 ◆samaki,-	虫 ◆mdudu, wa-	鳥 ; ndege,-	動物・獣 mnyama, wa-
[J-E] **	: x	x	nswi,-	x	; x	x
Mwenyi	: mbuu	mpye	(e)nji	(e) songolo	; sinyunyi	siyamana
Nkoya	: mvubu	x	yinci	kalongolo	; kayoni	kayamana
Lenje	: mfubu	x	inswi	kalongolo	; ciyuni	nyama
Lungu	: cibooko	kalukuluku	inswi	icipaaso	; icuunyi	iinyama
Nilamaba	: kiooko	x	nsii	muduudu	; noni	nima
Pare	: x	x	nguluma	mududu	; ideghe	mnyama

*注) バントゥ6部族語はILCAA (1987, 1989; Y. Yukawa, Ry. Kagaya)による。

**注) [J-E]はF. Johnson (1939) A Standard Swahili-English Dictionaryを示し、この欄の(x)印は標記のスワヒリ語以外のスワヒリ語がないことを表す。

尚この表には次の項で考察する語も含めている。

これで明らかのように、カバ、ダチョウに対して東アフリカのバントゥ部族名が確認できたので、この2例は「乗り換え」である事が解った。またカバ [◆kiboko] の場合Lungu語、Nilamaba語ではカバ [cibooko, kiooko] であることから、ここでは他の4部族より早く [◆kiboko] への [乗り換え] が起こったと考えられる。

また [◆kiboko] はアラブ語で鞭である。筆者はフィールドでカバの革は鞭に最も適しているということは聞かされて来たし、また現在の刑法でもキボコ [苔刑] が行われていることは見聞したが、鞭がアラブ語であったことをここで初めて知った。この「きつい」鞭 [◆kiboko] を求

めてアラブ人がカバをバントゥ民に求め、その鞭 [◆kiboko] でバントゥ民が痛い目をしている間に、カバが [◆kiboko] になったのであろう。しかしダチョウ [◆mbuni] については解らない。

表 2-4 : 動物[野生動物・家畜]

[野生動物] [* : F. Johnson (1939)に記載なし, M. Maimu (1982)のみ]

- * babakoto,- *Cercocebus albigena* (nyani ひひ)。
- bongo,- *Boocerus* sp. ボンゴ(大型かもしか)。
- bweha,- (mbweha,-) *Canis* spp. ジャッカル。
- buku, ma- (ndezi,-) *Cricetidae*, *Gerbillidae* 大野鼠。
- cheche,- (⇒kicheche, vi-)
- choroa,- *Oryx gazella* オリックス(大形かもしか)
- chui,- (nunda,-) *Panthera* sp. ひょう。
- * dikidiki,- *Rhyncotragus* spp. デイキデイキ(小型かもしか)。
- dondoro,- (tondoro,-) *Raphiceros* sp. (小型かもしか)。
- duma,- *Achinonyx jubatus* チーター。
- faru,- (kifaru, vi-/pea,-) *Diceros bicornis* (二角) さい。
- fisi,- (kingugwa, vi-) *Hyena* sp. ハイエナ。
- * fisi-maji *Aonyx* sp. かろうそ。
- * fuko,- *Bathyerugidae* 野鼠(大形)。
- fungo,- *Civettictis* sp. じゃこう猫。
- funo,- (mbutuka, kiduku) *Cephalophus* spp. ダイカー(小かもしか)。
- kakakuona,- *Manis* sp. せんざんこー。
- * kalunguyeye,- *Erinaceus* sp. はりねずみ。
- * kamendegere,- *Pedetes* sp. とびうさぎ。
- kanu,- (kala,-) *Genetta* spp. 山猫。
- ◆kiboko, vi- *Hippopotamus* sp. かば。
- * kichakuro, vi- *Xerus* sp. (りす)。
- kicheche, vi- (cheche,-) *Ictonyx* sp. 大形いたち。
- kidiri,- (kindi,-) *Paraxerus* sp. りす。
- kiduku, vi- (⇒funo,-)
- kifaru, vi- (⇒faru,-)
- kima,- *Cercopithecus* spp., *Erithrocebus* sp. 猿。
- kimburu,- (paka-shume,-) *Felis lybica* やま猫。
- kindi,- (kidiri,-) *Helosciurus* sp. りす。
- kingugwa, vi- (⇒fisi,-)
- kirukanjia, vi- *Anomaluridae* りす。
- * kitafe, vi- *Helogale* sp. いたち。
- kitungule, vi- (⇒sungura,-) *Pronolagus* sp. うさぎ
- komba,- *Galago senegalensis* ガラゴ(原猿の一種)。
- kongoni,- *Alcelaphus cokii* コンゴニ(中型かもしか)。
- * konzi,- *Alcelaphus ichtensteinii* コンゴニ(")。

- *korongo,- *Hippotragus aequinus* (大型かもしか)。
- kulungu,- (mbawala,-;⇒pongo,-)
- kuro,- *Kobus* spp. (大型かもしか, 二種)。
- kwanga,- (⇒pimbi,-)
- malu,- (⇒swala,-)
- mbega,- *Colobus* spp. コロブス類(白黒コロブスなど四種)。
- mbogo,- (⇒nyati,-)
- mbungu,- (⇒pofu,-)
- mbutuka,- (⇒funo,-)
- mbuzi-mawe *Oreotragus* sp. (岩場に住む小型かもしか)。
- mbwa-mwitu *Lycaon pictus* リカオン(やまいぬ)。
- mbweha,- (⇒bweha,-)
- mind,- *Cephalophus spadix* ダイカー(小型カモシカ)。
- *mondo,- *Felis* sp. (ねこ科, 中型)。
- muhanga, wa- *Orycteropus aler* つちぶた。
- ndezi,- Thryonomyidae 大野鼠。
- *ndimba,- *Cephalophus monticola* ダイカー(小型かもしか)。
- ndovu,- (⇒tembo,-)
- ngedere,- (⇒tumbili,-)
- ngiri,- *Phacochoerus aethiopus* いはいのしし。
- nguchiro,- *Herpestes* sp. 他六種, いたち。
- nguruwe,- *Hylochoerus meinertzhageni* 他二種, いのしし。
- nguva,- *Dugon dugon* ジュゴン(海牛)。
- *nsya,- (ngorombwe,-) *Sylvicapra* sp. ダイカー(小型かもしか)。
- nunda (⇒chui)
- nunguri,-/nungu,- *Hystrix* spp. やまあらし(二種)。
- nyamera,- *Damaliscus jimela* トビ(中型かもしか)。
- nyangumi,- 鯨
- nyani,- *Papio anubis* 他一種, ひひ。
- nyati,- (mbogo,-) *Cycerus kaffer* アフリカ野牛。
- nyegere,- (nongwa,-) *Mellivora capensis* はちみつあなぐま。
- nyumbu,- *Connochaetus taurinus* うしかもしか(亜種四)。
- *nzohe,- *Tragelaphus spekei*(中型かもしか)。
- paa,-(suni,-) *Nesotragus* sp. (小型かもしか)。
- paka-shume (⇒kimburu,-)
- paka pori,- *Profelis aurata*(やまねこ)。
- palahala,- *Hippotragus niger*(大形かもしか)。
- panya,- Muridae 小型鼠類。
- pea,- (⇒faru,-)
- pelele,- (◆wibari,-) *Dendrohyrax* sp. (樹上)ハイラックス。
- *pimbi,- (kwanga,-) *Procavia* sp. (岩)ハイラックス。
- pofu,- *Traurotragus oryx* エランド(大型かもしか)。
- *pongo,- (kulungu,-) *Tragelaphus scriptus* (中型かもしか)。

- popo,- *Chiroptera* こうもり(大小二種)。
 *poto,- *Perodicticus potto* ポト(原猿)。
 pundamilia,- *Equus burchelli, Eq. grevyi* しまうま(二種)。
 *sange,- *Macroscelididae* とびねずみ
 *sheshe,- *Adenota vardoni* ブク(中型かもしか)。
 simba,- *Felis leo* ライオン。
 simba mangu,- *Lynx caracal* カラカル(やまねこ)。
 simba marara (⇒fisi,-)
 sokwe-mtu,- *Pan troglodytes* チンパンジー。
 sungura,- *Lepus capensis* 他一種。のうさぎ。
 swala,- (malu,-) [中型かもしか]の総称。
 swalagranti,- *Gazella granti* グラントガゼル(中型かもしか)。
 swalapala,- *Aepyceros melampus* インパラ(")。
 swalatomi,- *Gazella thomsoni* トムソンガゼル(")。
 swalatwiga,- *Litocranius* sp.(首長, 中型かもしか)。
 *taya,- *Ourebia ourebi* オリビ(中型かもしか)。
 tembo,- (ndovu,-) *Loxodonta africana* アフリカぞう。
 tohe,- *Redunca* spp. リードバック(羊程のかもしか, 三種)。
 tondoro,- (⇒dondoro,-)
 tumbili,- (ngedere,-) *Cercopithecus aethiopsis* グウェノン(さる)。
 twiga,- *Giraffa camelopardalis* 他一種。キリン。
 ◆wibari,- (⇒pelele,-)

[家畜]

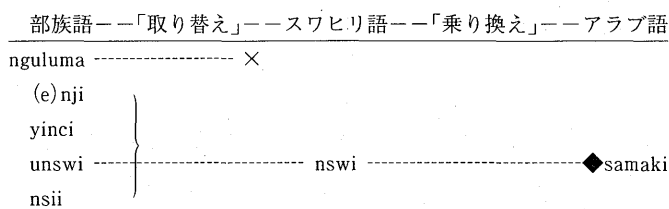
- mbuzi,- 山羊。
 kondoo,- 羊。
 punda,- ろば。
 ng'ombe,- 牛。
 ◆farasi,- 馬。
 ◆ngamia,- らくだ。

7) 動物の総称について: (表2-3) 参照

動物の総称は、動物(又は獣) [mnyama], 鳥 [ndege], 魚 [◆samaki], 虫 [◆mdudu] がある。これを表2-3について考える。

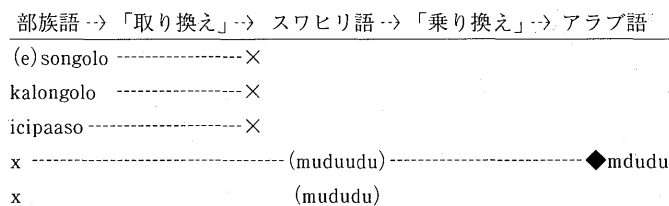
- ① 現行スワリ語で獣 [mnyama] は他の6部族語 [siyamana, kayamana, nyama, iinyama, nima, mnyama] と同じ系統である。また Pare 語はスワリ語と同じである。このような同じ系統のバントゥ語同士がまとまって一つのスワヒリ語が成立するのが、最も考え易い場合である。(しかし筆者はその実態を具体的に把握していない。)
- ② 現行スワリヒ語で鳥 [ndege] には二つの系統 [noni; ideghe] が見られる。このように、複数の異なったバントゥ語の間で一つのスワヒリ語が選択されまとまって行く過程を、バントゥ語からアラブ語へ「乗り換え」る選択の場合と区別して、バントゥ語同士の「取り替え」とする。このような「取り替え」が最も一般的なものであろう。

- ③ 魚 [◆samaki] はバントゥ語で [nswi] (F. Johnson, 1939) と掲載されているが、「稀に使われる」と説明がある。また6部族語は [nswi] 系統 [(e)nji, yinci, inswi, nsii] と [nguluma] の系統が認められる事から考えて、この場合は [nswi] から魚 [◆samaki] へ「乗り換え」中であると言えよう。このような「乗り換え」中の [nswi] の例から次のような経過が考えられる。即ち



恐らく、スワヒリが成立し、それからスワヒリの展開が「スワヒリのバントゥ化」に因って可能であった(日野, 1980)という、その過程はこのようなバントゥ諸語同士の「取り替え」とアラブ語への「乗り換え」であったであろう。

- ④ 虫 [◆mdudu] は [(e)songolo, kalongolo] [icipaaso] [muduudu, mududu] の三系統が見られる。



この場合は魚の場合の様に「乗り換え中」のスワヒリ語 [nswi] が見当たらないが、魚の場合と同じようにバントゥ語の「取り替え」とアラブ語への「乗り換え」があったと考えてよい。なお虫 [◆mdudu] の場合にもカバ [◆kiboko] の様に、Nilamba 語と Pare 語で他の部族より早い「アラブ化」(スワヒリ化)の進行が見られる。

しかし何故獣と鳥がバントゥ語で、魚と虫がアラブ語なのか、これは「バントゥのアラブ化」の問題であると考えるが、本論はその形態論に止どめる。ここで、これまで分析考察して来た「アラブ文化に対するバントゥの対応」の結果を列記する。

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| I : バントゥ語同士の「取り替え」。 | 例：鳥 [ndege] |
| II : アラブ語をバントゥ語に「付け足し」。 | 例：オウム [◆dura] |
| III : アラブ語とバントゥ語の「使い分け」。 | 例：ハイラックス [◆wibari] |
| IV : アラブ語へバントゥ語から「乗り換え」。 | 例：カバ [◆kiboko] |
| I + IV : 「取り替え」 + 「乗り換え」。 | 例：魚 [nswi + ◆samaki] |

4. 3. 身体名称について：

前二章 [4. 1 ~ 2] でまとめた「バントゥの対応」によって、身体名称に於ける「対応」を考察する。(表・3 参照)

1) 「付け足し」による細分化：

ひげ [devu, ma-]
 あごひげ udevu, n-
 ほほひげ ◆sharafa,-
 くちひげ ◆sharubu,-

ひげ [devu] はアラブ語のほほひげ [◆sharafa], くちひげ [◆sharubu] を「付け足し」、あごひげ [udevu] とあわせてひげ [devu] を細分化している。

乳房 [titi, ziwa] も乳首 [◆chuchu] を「付け足し」で部位名を細分化している。

2) 「使い分け」——丁寧語：

小便 [mkojo, ◆haja ndogo]
 大便 [mavi, choo; ◆haja kubwa]

バントゥ語とアラブ語の併用で、「使い分け」である。これはは便所 [choo, ◆msala] と同様に、明らかに場面による「使い分け」で [◆haja (必要)] を使った丁寧語である (人前などで一寸便所 (トイレ) に…) など)。

また、痰 [kohozi, ◆belghamu] の「使い分け」は、アラブ語が (私の体験では丁寧語かどうか判然としないが) 医学用語らしく、マンガーラの日常では聞かれない。

3) 男女による「対応」の違い：

性器 utupu, uchi, mbeleni.
 男の性器 mboo / mboro,- ◆dhakari,- ◆firaka,- ◆zubu,-
 睾丸 pumbu, ma- kende, ma- ◆korodhani,-
 精液 ◆manii (MA) ◆shahawa,-
 陰毛 mavuzi (MA)
 女の性器 kuma
 処女膜 ubikira (U)

性器の総称 [utupu, uchi, mbeleni] にはアラブ語はない。しかし男性器他に見られるアラブ語との併用即ち「使い分け」が女性器 [kuma] 等には見られない。このような性 (男女) によるアラブ名にたいする対応の違いは、「アラブ化」の問題の一つに取り上げなければならない考えている。

4) 身体による計測の単位：「付け足し」

身体名称ではないが、手足による計測の単位は下のとおり総てアラブ語であり、「付け足し」である。

肘から手先まで ◆dhiraa kamili
 肘から手首まで ◆dhiraa konde
 親指から小指まで ◆shibiri,-
 親指から人差し指まで ◆shibiri mdogo / ◆futura,- / ◆morta,-

一步, 歩幅 ◆hatua,-

また, 計量計測に関する用語は今後まとめて分析考察したいと考えている。

5) 英語による「付け足し」: バントゥ語 [mshipa] について。

現行スワヒリ語の身体名称の中で, 最もバントゥ的である語は [mshipa] であろう。これは表3で解るように, 肉体 [mwili] を構成する部分——皮膚 [ngozi], 肉 [nyama], 骨 [mfupa], 腹わた [matumbo], 器官 [kiunggo] ——にたいして, 血管・神経・筋肉を併せて [mshipa] 一語で表している。そして, この三区分はそれぞれ下のようにスワヒリ語で説明され, それに英語が「付け足されて」いる。

血管 [mshipa wa ◆damu] 大動脈 [●aorta,-]
動脈 [●ateri,-]
静脈 [●vena,-]
毛細血管 [●kapilari,-]

神経 [mshipa wa ufahamu, ●neva,-]

筋肉 [mshipa wa nguvu,- ●musuli,-]

この対応は三つのスワヒリ語に英語が対応するのではなくて, 一つのスワヒリ語 [mshipa] に六つの英語が「付け足され」て, [mshipa] が正確に細分化されたのであると考える。従って三つの部分のスワヒリ語はもともと在ったものではなくて, 「付け足した」英語からの発想でありスワヒリ語による翻訳である, と筆者は考える。

6) 血 [◆damu] について: 「乗り換え」か「穴埋め」か?

下の三つの部分を並べてみて, なぜ血 [◆damu] だけがアラブ語なのか?

肉 nyama,-
脂 mafuta (MA)
血 ◆damu,-

この疑問は身体名称全体 (表3) を見れば一層はっきりする。主な身体名称はこの一語を除いてすべてバントゥ語である。これについて筆者は次のように考えてみた。

a) 今手元に在る資料が限られていて確認出来ないが, もし幾つかの事例で見て来たように<血>にバントゥ語が在れば, これは「乗り換え」である。それなら何故この一語だけに「乗り換え」が起こったのか, 問題である。しかし, 繰り返し述べているように本論では対応の理由には入らない。

b) またもしバントゥ語がないことが確認出来れば, 直ちにこれを「付け足し」と考えてよいであろうか, という問題である。そこで「ない」という仮定で考えると, 筆者はこの事例は単に新しい事物の「付け足し」ではなくて, バントゥにとって血 [◆damu] は肉 [nyama] の概念の中に, あるいは肉体 [mwili] の概念の中の, 認識のなかった空白であって, その空白を「発見」してそれを [◆damu] で埋めたのであろう, と考える。あるいは次のように考えてもよい。即ち, アラブ語 [◆damu] によって認識しなかった「穴」が明らかになった, ということである。このような対応を新たに「穴埋め」とする。

注) その後, 血 [◆damu] の部族語が解った (ILCAA, 1987, 1989) ので, 上の点につ

いては「乗り換え」であることがはっきりした。

血 [◆damu]

Mwenyi 語: (o)ynyinga

Nkoya 語: muketha

Lenje 語: bulowa

Lungu 語: uwazi

Nilamba 語: megali

Pare 語: sakama

ただここで取り上げた新しい対応「穴埋め」の考えは、4 節(時)、5 節(数)において改めて取り上げる。

表 3 : [身体名称: Maungo, Mwili]

A) Maungo 身体:

kichwa, vi- 頭。

mwili, mi-/maungo (MA) 身体, 胴体。

mkono, mi- 手, 腕。

mguu, mi- 足, 脚。

B) Mwili 肉体:

ngozi,- 皮, 皮膚。

malaika (MA) 体の毛。

nyeleo, ma- 毛穴。

upele, pele できもの。

nyama,- 肉。

mafuta (MA) 脂, 脂肪。

◆damu,- 血。

mshipa, mi- 血管, 神経, 筋肉。

mshipa wa damu 血管。

●aorta 大動脈, ●ateri 動脈,

●kapilari 毛細血管, ●vena 静脈。

mshipa wa ufahamu 神経, ●neva 神経。

mshipa wa nguvu 筋肉, ●musuli 筋肉。

mfupa, mi- 骨。

utumbo (U)/matumbo (MA) 腹わた, 内臓。

kiungo, vi- 器官, 内臓。

matumbo (MA) 大腸。

uchango/chango,- 小腸。

ini, ma- 肝臓(かんぞう)。

wengu, ma- 脾臓(ひぞう)。

figo, ma-/nso,-/buku,- 腎臓(じんぞう)。

pafu, ma- 肺。(pumu, ma- 動物の肺)

moyo, mi- 心臓。

kibofu, vi- 膀胱(ぼうこう)。

mji wa mimba 子宮。

utambi, tambi 腹膜。

C) Kichwa 頭：

kichwa, vi- 頭。

shingo, - 首。

unywele, nywele 髪の毛。

kidazi, vi- / upara, para はげ。

mvi, - 白髪。

kitosi, vi- / utosi, tosi 脳天。

kisogo, vi- 後ろ頭。

kikosi, vi- 首筋, うなじ。

fuvu, ma- (～la kichwa) 頭蓋骨。

ubongo (U) 脳, 脳みそ。

bongo, ma- 脳, 頭脳(頭)。

uso, nyuso 顔。

shavu, ma- (～la uso) ほほ。

kifinyo, vi- えくぼ。

kidudusi, vi- / kijiwe, vi- / chunusi, - にきび。

kiwaa (～cha sura) ほくろ。

paji, ma- (～la uso) 額(ひたい)。

kipaji, vi- / kikomo, vi- (～cha uso) 額。

kidundu, vi- " 。

(?) 眉間(みけん)。

panja, ma- こめかみ。

jicho, macho 目。

nyusi, - 眉毛。

ukope, kope 睫(まつげ)。

mboni, - 瞳(ひとみ)。

kikope, vi- 瞼(まぶた)。

utongo, ma- 目やに。

machozil (MA) 涙。

sikio, ma- 耳。

pua, ma- 鼻。

makamasi (MA) 鼻みず。

kinywa, vi- 口。

jino, meno 歯。

mdomo, mi- 唇。(嘴)

ulimi, ndimi 舌。

koo, - 喉。

kidaka tonge 口蓋垂。

(ute), mate 唾。

◆belghamu, - / kohozi, ma- 痰。

kikohozi, vi- 咳き。

kidevu, vi- 顎。

devu, ma- ひげ。

udevu, n- あごひげ。

◆sharafa,- ほほひげ。

◆sharubu,- 口ひげ。

D) Maungo, Kiwiliwili 胴体, 体:

bega, ma- 肩。

fuzi, ma- 肩(腕の付け根)。

mtulinga, mi- 鎖骨。

kwapa,- 腋(の下)。

mvungu, mi-(~wa kwapa) 腋の下(のくぼみ)。

mavuzi (MA) 腋毛。

mgongo, mi- 背中。

uti, nyuti 背骨。

kifua, vi- 胸。

pafu, ma- 肺。

ubavu, m- あばら [kidari, vi- 獣・鳥のあばら]。

ziwa, ma-/titi, ma- 乳, 乳房。

dodo, ma- (娘の)乳房。

◆chuchu,- 乳首。

tumbo, ma- 腹, おなか。

kitovu, vi- へそ。

mvungu, mi- (下腹?)

kiuno, vi- 腰。

unyonga, nyonga 腰骨。

kinena/manena 股。

tako, ma- 尻。

tokoni/tokono, ma-/kitokono, vi-/kifandugu, vi- 尾てい骨。

konyo, vi-/mkundu, mi- 肛門。

mkojo/◆haja ndogo 小便。

mavi (MA)/◆haja kubwa 大便。

kikundu, vi-/mjiko, mi- 痔(じ)。

◆bawasiri,-/◆futori,- ” 。

utupu (U)/uchi (U)/mbeleni 性器。

uume (U)/mboo,- 男の性器。

mboo/mboro,- 男根。

◆dhakari,-/◆firaka,-/◆zubu,- ” 。

pumbu, ma-/kende, ma- 睾丸。

◆korodhani,- ” 。

◆manii (MA)/◆shahawa,- 精液。

mavuzi (MA) 陰毛(男・女)。

uke (U)/kuma,- 女の性器。

kuma,- 女陰。

kinembe, vi- / kisimi, vi- / kizinda, vi- クリトリス。

◆ubikira (U) 処女膜。

utoko (U) 分泌液。

E) Mkono na Mguu 手足：

mkono, mi- 手，腕。

kiganja, vi- 手の平。

kitanga cha mkono, vi- ”。

kingaja, vi- 手の甲。

kofi, ma- 手平。[makofi (MA) 拍手]

ngumi, - 拳(こぶし)，げんこつ。

konde, ma- 拳(こぶし)。

chopa, ma- 一掬い。

konzi, - 一握り。

ukufi (U) / ukofi (U) ひと掬い。

kidole, vi- 指(手・足の)。

kidole gumba 親指。

kidole cha ◆shahada 人差し指。

kidole cha kwanza ”。

kidole kikubwa / ~cha kati 中指。

kidole cha kati ya kando 薬指。

kidole cha mwisho 小指。

ukucha, kucha 爪(手・足の)。

kisigino, vi- 肘(ひじ)，踵(かかと)。

kifundo, vi- / kiwiko, vi- 手首，くるぶし。

shavu la mkono 上腕の筋肉。

◆dhiraa kamili 肘から手先までの長さ。

◆dhiraa konde 肘から手首までの長さ。

◆shibiri, - 親指から小指までの長さ。

◆futuri, - / ◆morta, - / ◆shibiri mdogo 親指から人差し指までの長さ。

mguu, mi- 足，脚。

manena (MA) 股(また)。

kinena, vi- 股の付け根。

paja, ma- 腿(もも)。(kiweo, vi- 鳥・獣の腿)。

goti, ma- 膝(ひざ)。

muundi/muundo, mi- 脛(すね)。

shavu la mguu, ma- 腓(こむら)，ふくらはぎ。

◆hatua, - 一歩，歩幅。

wayo, nyayo 足跡。

4. 4. 時について：

1) 季節 [◆majira, ◆wakati]：

季節というバントゥ語はない。東アフリカのサバンナは、雨 [mvua] によって二分され、5～10月の乾季と、11～5月の雨季の二季がある。表4-1でサバンナの季節を示す。

表4-1：東アフリカのサバンナの季節。

Mwezi 月	Upepo 風	Mvua 雨	Joto, ◆Baridi 暑冷
12	:	:	:
1	◆kaskazi/◆msimu	:	:
2	北東の季節風	masika 大雨季	kiongazi 空が輝く
3	:	kifuku 雨季(暑い)	暑い季節
4	maleleji 風ぎ	:	:
5	/tanga mbili	:	:
6	:	:	:
7	◆kusi 南西の季節風	:	kipupwe 涼しい
8	:	mvua wa mwaka	季節
9	◆demani ザンジバル	乾季中の雨	:
10	の春	:	:
11	maleleji 風ぎ	:	:
12	/tanga mbili	mvuli 小雨期	:

この二つの季節感覚は、風 [upepo]・雨 [mvua]・寒暑 [◆baridi, joto] によっており、雨季にかかわる季節名には、北東の季節風が吹き [◆kaskazi]、大・小雨期 [masika/kifuku, mvuli] で、空が輝く暑い季節 [kiongazi]、である。熱帯乾燥地帯の季節は不安定であるが、およそ11月から始まった雨季が終り、5月の終わりの最後の雨が降った後、半年南西の季節風 [◆kusi] が吹き、ザンジバルの春 [◆demani] を迎える。その乾季のさなかに一雨 [mvua wa mwaka] があり、涼しい半年 [kipupwe] が続く。(和崎, 1980)

雨季の到来を告げる北東季節風 [◆kaskazi] に乗って、アラブの商人たちはダウ(伝統的アラブの帆船)でインド洋を渡り、東アフリカにやって来て交易に従事し、乾季の南西季節風 [◆kusi] でアラブ半島に帰って行く。これはアラブの季節感である。これに対して、バントゥは一年を雨 [mvua] と寒暑 [◆baridi, joto] で区切っている。つまり、バントゥの季節感(雨と寒暑)の中にアラブの季節感(風)を取り入れた「付け足し」の対応である。なお、方向を示す語は総てアラブ語の「付け足し」で、東 [◆mashariki]、西 [◆magharibi]、南 [◆kusi]、北 [◆kaskazi] である。

ここで注意をひくことは、ある一つのまとまった概念、例えば上記の方向概念はアラブ語でままとっており、季節感の中の風はアラブ語、雨などはバントゥ語でそれぞれままとっている。このような「対応」が基本的であると考えられるのだが、それに比べて寒暑 [◆baridi, joto] のように、また前章の肉と血 [nyama, ◆damu] のように、まとまった概念の中でその一方がアラブ語であ

る場合が認められることは、[バントゥの対応] でどう考えたら良いのか、本論ではこの問題に触れないが、筆者は「バントゥのアラブ化」あるいは「スワヒリのバントゥ化」の興味ある問題であると考えている。(付記. 和崎(1990・印刷中)でとりあげた。)

2) 年・月・日 [mwaka, mwezi, siku]

時 [◆wakati] を現すバントゥ語は年 [mwaka], 月 [mwezi], 日 [siku], の3語である。次に時を表すスワヒリ語を示す。(表4-2)

表4-2: 時の単位。	◆karne,-/◆karini,-	世紀。
	mwaka, mi- 年。	
	[◆umri (U) 年令。]	
	mwezi, mi- 月。	
	◆juma, ma-/●wiki,-	週。
	skiu,-	日。 usiku, siku/ma- 夜。
	◆saa,-/ma-	時間, 時(じ)。
	◆dakika,-	分。
	◆nukta,-	秒。

これによって考えられることは、バントゥ語の三つの単位 [mwaka, mwezi, siku] に世紀 [◆karne], 週 [◆juma, ●wiki], 時間 [◆saa], 分 [◆dakika], 秒 [◆nukta] という新しい単位を「付け足し」て時を細分化し、正確化していることである。しかしこの「付け足し」は、ひげ, [devu] におけるほほひげ [◆sharafa] などの場合と異なった意味をもっている、と筆者は考える。即ち、この場合は一見「付け足し」による細分化には違いないが、筆者はこれを、前章の血 [◆damu] の項で述べたように、時 [◆wakati] の概念の「穴を埋める」対応とする。従って「穴埋め」は単なる内容の充実や細分化と違って、「時」という構造の確立を意味するものである。言い換えれば、これによって時 [◆wakati] という概念が総括的意味を持つことになるのである。ここで筆者は、時の単位と時の概念に対するバントゥの対応をアラブ文明に対する「選択」ではなく、「発見」による対応とする。要するに、渡来した珍しいラクダ [◆ngamia] や美しいアラブ風の腕輪 [◆bangili] をバントゥ語に「付け足す」選択は、週 [◆juma] で時の「穴」を発見して「埋める」事より、バントゥ民の意識の中で文化の連続性が強い、逆に「穴」の発見は意識における非連続性を越える対応、と筆者は考えるのである。

3) 時(時間)を表す概念について:

次に、時(時間)を表す語を取り上げる。ここでは細かい意味の違いや重なりに立ち入らずに、まとめて列挙する。:

表4-3: 時(時間)

バントゥ語: pindi,-/ma-; kitambo, vi-

アラブ語: ◆saa,-/ma-; ◆wakati, ny-; ◆muda,-; ◆muhula,-; ◆zamani,-

これは、アラブ語の多様さがこれによって、バントゥがもっていた、少なくて曖昧な時の概念を明確にして、スワヒリ語を多様化した「付け足し」の対応に外ならない。

4) 一年の暦：月の名前。

東アフリカは二つの暦で動いている。一つは太陽暦で日常生活はこれによっている。(表4-4(a))。

表4-4(a) 太陽暦[mwezi wa kizungu]：

スワヒリ暦		
mwezi wa kwanza	1月。	●Januari
mwezi wa pili	2月。	●Februari
mwezi wa tatu	3月。	●Machi
mwezi wa nne	4月。	●Aprili
mwezi wa tano	5月。	●Mei
mwezi wa sita	6月。	●Juni
mwezi wa saba	7月。	●Julai
mwezi wa nane	8月。	●Agosti
mwezi wa tisa	9月。	●Septemba
mwezi wa kumi	10月。	●Oktoba
mwezi wa kumi na moja	11月。	●Novemba
mwezi wa kumi na mbili	12月。	●Desemba

太陽暦はスワヒリ語で mwezi wa kizungu (ヨーロッパ式の月) といい、このスワヒリ語の月の数え方は、1の月、2の月、…と数える。それを英語の月そのままを移した呼び方、●Januari, ●Februai…と併用しているから、これは「使い分け」の形である。しかし筆者は、月を1, 2…と数えて表す数え方は、英語の月が入ってから後のことではないか、と考えて、これは英語の「付け足し」の後でスワヒリ式数え方が出来たと考える。元々バントゥ文化にどのような月の数え方があったか、が分かれば、「使い分け」か「付け足し」の後の「言い換え」か、決めることにする。

もう一つの暦はイスラム信仰による太陰暦である。(表4-4(b))。しかし、イスラム暦は「閏月」をおかない太陰暦であるから、この一年は季節による日常の生活感覚の一年と年におよそ29日ずれて行く(短くなる)。だから、国民の祝日[sikukuu]であるラマザン[◆Ramadhani]は、生活暦(太陽暦)の上で毎年およそ一月早くなっている。

表4-4(b) イスラム暦(太陰暦)[Mwezi wa Kiislaam]：

スワヒリ暦	アラブ暦
Mfunguo nne (絶食明け四月)	1月 ◆Muharamu
Mfunguo tano (絶食明け五月)	2月 ◇Safar
Mfunguo sita (絶食明け六月)	3月 ◇Rabi' al-Awwal
Mfunguo saba (絶食明け七月)	4月 ◇Rabi' al-Thani
Mfunguo nane (絶食明け八月)	5月 ◇Jumada al-Ula
Mfunguo tisa (絶食明け九月)	6月 ◇Jumada al-Akhira
Mfunguo kumi (絶食明け十月)	7月 ◆Rajabu
Mfunguo kuni na moja (十一月)	8月 ◆Shabani

Mfunguo kuni na mbili (十二月) 9月 ◆Ramadhani
 Mfunguo mosi (絶食明け一月) 10月 ◆Shawali
 Mfunguo pili (絶食明け二月) 11月 ◇Dhu' l-Qa'da
 Mfunguo tatu (絶食明け三月) 12月 ◇Dhu' l-Hijja

② ◇印は、F. Johnson (1939)に記載なし。

アラブ暦は日本イスラム協会編(1982)イスラム事典による。

この二つのイスラム暦が実際にどう使われているか、筆者の体験では明らかではないがアラブ名の月 [◆Muharamu, ◆Rajabu, ◆Shabani, ◆Ramadhani, ◆Shawali] を耳にした他は、スワヒリ暦の言い方であった。

ここで筆者が問題にしたいのは、スワヒリとアラブのイスラム月の数え方の違いである。それは、アラブにおいてイスラム暦は一月 (◆Muharamu) から始まるが、スワヒリでは断食月 [◆Ramadhani] (アラブ暦の9月) に続く断食明けの月 [Mfunguo] を1月から数えていることである。従って、ラマザンは断食明けの月12月であり、またアラブ暦の1月はスワヒリ暦 (断食明けの月) の4月に当たる。この食い違いは、スワヒリ成立の基本の図式である「アラブによるバントゥのイスラム化」から考えれば、大きい問題である。筆者はこの「ずれ」を次のように考える。即ち、海岸バントゥがイスラム信仰を取り入れたうえで、イスラムの月の数え方はスワヒリ自身の「発想」によって「言い換え」たものが、スワヒリ暦である。

5) 週・曜日 [◆juma, ma- / ●wiki, -週]

表4-5 曜日 [◆juma, ma- / ●wiki, -週] :

スワヒリ	アラブ
◆Jumamosi 土曜日。	◇Yawn al-Sabt
◆Jumapili 日曜日。	◇Yawn al-Ahad
◆Jumatatu 月曜日。	◇Yawn al-Ithnanyi
◆Jumanne 火曜日。	◇Yawn al-Thalatha'
◆Jumatano 水曜日。	◇Yawn al-Arba'a'
◆Alhamisi 木曜日。	◇Yawn al-Khamis
◆Ijumaa 金曜日。	◇Yawn al-Jum'a

スワヒリの週 [◆juma, ●wiki] の七曜日は、安息日 (金曜日 [◆Ijumaa]) に続いて、土曜日 [◆Jumamosi] で始まり木曜日 [◆Alhamisi] で終わる。これはアラブの金曜日 [Yawn al-Jum'a], 木曜日 [◆Yawn al-Khamis] をそのままバントゥに移したものであって、曜日全体がバントゥへの「付け足し」である。(曜日のアラブ語表記は日本イスラム協会編『イスラム事典』1982による)

しかし、スワヒリとアラブの曜日の数え方は、上の二つ以外は全く違っている。表4-5で解るとおり、スワヒリでは土曜日 [◆Jumamosi] を週の第一日としているのに対して、アラブではそれを [◆Yawn al-Sabt] 第七日に数えている。これは前項「イスラム暦」の月の数え方の食い違いと同様に、バントゥのアラブ化の構図からずれている。つまり、曜日でも月と同様に、文

化としてアラブを「付け足し」たが、曜日の数え方はスワヒリによる「言い換え」がある。その「スワヒリの発想による言い換え」は、「スワヒリのバントゥ化」(日野:1980)にかかわる問題をもっている、と筆者は考えているが、本論では言及しない。

6) 昨日・今日・明日 [jana, leo, kesho] :

表4-6は今日 [leo] を中心にした、日の呼び方である。

表4-6 昨日・今日 [jana,-; leo,-] :

juzijuzi 以前、前に。
 juzi, ma-/kushinda jana 一昨日。
 jana,- 昨日。
 leo,- 今日。
 kesho,- 明日。
 kesho kutwa あさって(明後日)。
 mtondo, mi- しあさって。
 mtondogoo/kushinda mtondo (あさってのあさって)。

これらの呼び方は、すべてバントゥ語である点が、バントゥのアラブ化を考える手掛かりの一つである、と筆者は考えるが、ここでは問題提起に止めておく。

ここで筆者が問題に取り上げるのは、「今日 [leo] がいつであるか?」ということである。この点について、次の二つの事例からバントゥの一日(即ち今日)は、「日没から次の日没までの24時間で、夜と昼からなっている」事を示す。

例-1) 明後日 [kesho kutwa] という語は、kesho(明日)とkutwa(日が沈む)から出来ている。即ち、バントゥの明後日は「明日の日が沈む」日の事であり、これによって一日が日没から始まることが理解出来る。

例-2) 夜 [usiku] のスワヒリ語訳を見る。

usiku : (F. Jonson, 1935) Wakati wa giza unaotangulia mchana, usiku na mchana ni siku moja.

これで、「夜は昼に先行する闇の時間」と説明されている。続いて、「夜と昼とが一日である」とのべている。これで解るとおり「夜と昼」がバントゥの一日である。

付記：なおこの点について、筆者のマングーラ村(タンザニア, 1963~64)の調査生活の間に、調査の一環としてとなり近所の人々に、紙と鉛筆を配って作文を書いてもらった。その題が「今日した仕事 [kazi ulizofanya leo]」であった。そんな日記風の作文の中に、「今日学校からかえって……」と夕方から書き初めて、明日まで書いた例が三人あった。そのときこれを筆者は、書いたことのない日記に対する子供の混乱と受け止めていたが、その後スワヒリにおける今日 [leo] の意識の例証であろう、と考えている。

しかし、次の例を見て欲しい。

usiku (TAUKI, 1981) : Wakati wa giza baada ya kutua jua.

これは、ダル・エス・サラーム大学編のスワヒリ・スワヒリ辞典であるが、これを見ると明らかに逆の説明で、「夜は太陽が沈んだ [kutua] 後の闇の時間」となっている。

このような全く逆の夜 [usiku] にたいして、筆者は、これは誤りでなく、前者が伝統的な「夜」であるのに対して (F, Johnson, 1935), 後者は現代の「夜」である (TAUKI, 1981), と考えたい。つまりこれは、スワヒリにおける近代化の例であろう。

7) スワヒリの一日：

前項で述べたように、スワヒリの一日は夜と昼の24時間である。そのように考えてスワヒリの一日をまとめた。(表4-7) (右欄 [kizungu] は洋式の時間で6:00p.m.から書いてある。)

表4-7 スワヒリの一日：

kizungu	: kiswahili スワヒリの一日	: kiislamu イスラムの五拝
6:00 p.m.	: saa kumi na mbili (12) jioni : jioni 夕方。 : usiku 夜。	: ◆magharibi 夕方(の礼拝)。 : ◆isha/ esha 夜(の礼拝)。
12:00 p.m.	: saa sita (6) usiku 真夜中。	
2:00 a.m.	: saa nane (8) usiku : usiku wa manane 丑三つ時(うしみつどき)。	
4:00 a.m.	: saa kumi (10) usiku : mapambazuko 夜明け。	: ◆alfajiri 夜明け(の礼拝)。
6:00 a.m.	: saa kumi na mbili asubuhi : ◆asubuhi 朝。	
8:00 a.m.	: saa mbili asubuhi : mafungulia ng'ombe (牛の放牧の時間)	
12:00 a.m.	: saa sita (6) mchana : mchana 昼(間)。 : mchana mdogo 昼(間)。 : mchana mkuu 真昼, 正午。	: ◆adhuhuri 昼(の礼拝)。 : ◆alasiri 午後(の礼拝)。
4~6:00 p.m.	: mafungia ng'ombe (牛をつなぐ時間)	
6:00p.m.	: saa kumi na mbili (12) jioni	:

これで、スワヒリの日常生活の一日は、夕方 [jioni], 夜 [usiku], 朝 [◆asubuhi], 昼 [mchana] と、イスラムの五拝 [◆magharibi, ◆isha, ◆alfajiri, ◆adhuhuri, ◆alasiri] で区切られている。又五拝の時間は礼拝の時間の意味に限定されず、一般の生活時間を表すこともある。

これをまとめると、スワヒリの一日は日常に [◆asubuhi] を「付け足し」で区分し、それにイスラム信仰の側面でアラブ語の五拝を「付け足し」て「使い分け」ている、と考えられる。(朝 [◆asubuhi] が何故アラブ語か、は本論では言及しない。) ここに認められる「使い分け」は、スワヒリの一日を日常と信仰の二つの側面で構成し、「付け足し」と「使い分け」をしている点が、これまで挙げて来た「付け足し」「使い分け」と比べて、より次元の高い対応であると、筆者は考える。

4. 5. 数について：

表5-1は現行スワヒリ語の数である。

表5-1 [数： ◆tarakimu]——現行スワヒリ語で常用する数——

(A) 1～10	(B) 10～20	(C) 0～1,000,000,000
1: moja/mosi	10: kumi	0: ◆sufri/◆sufuri
2: mbili/pili	11: kumi na moja	10: kumi
3: tatu	12: kumi na mbili	20: ◆ishirini
4: nne	13: kumi na tatu	30: ◆thelathini
5: tano	14: kumi na nne	40: ◆arobaini
6: ◆sita	15: kumi na tano	50: ◆hamsini
7: ◆saba	16: kumi na ◆sita	60: ◆sitini
8: nane	17: kumi na ◆saba	70: ◆sabini
9: ◆tisa	18: kumi na nane	80: ◆themanini
(kenda)	19: kumi na ◆tisa	90: ◆tisini
10: kumi	(kumi na kenda)	100: ◆mia
	20: ◆ishirini	1,000: ◆elfu
	21: ◆ishirini na moja	100,000: ◆laki
		1,000,000: ●milioni
		1,000,000,000: ●bilioni

1) この数をまづ概観しておく。

(1) (C)欄 0から10億まで：0～1000 アラブ語（10のみバントゥ語）

10万 ヒンディ語，100万，10億 英語。「付け足し」

(2) (B)欄 10～19：バントゥ式の数え方である。即ち11は10と1（kumi na moja）と数える。

(3) 20～100：20，30……はアラブ語をもちいてバントゥ式の数え方をする。即ち21は20と1（◆ishirini na moja）である。99までこの数え方をする。

(4) 100～1000：100 [◆mia]，1000 [◆elfu] を使って，バントゥ式の数え方をする。即ち200は mia mbili，2000は elfu mbili……と数える。

このようにスワヒリ語の数え方はアラブ語ヒンディ語英語を「付け足し」て，それを併用してバントゥ式の数え方をするから，数全体としてはバントゥ語であって，大きい単位を「付け足し」てバントゥ語の数え方を広げたのである。

(5) しかし，(A) 欄 [1～10] のなかにはいっている 6・7・9 [◆sita, ◆saba, ◆tisa] はどう考えたらよいか？ この点については今は考えない。

(6) また，0 [◆sufri] をどう考えるか？ この点については後で述べる。

表5-1で見る限り，全体として数はバントゥ式数え方に非バントゥ語を「付け足し」ていると考えて間違いはない。

2) そこで、数におけるバントゥの対応を考えるために、ここでこれまでの事例の考察の手続きをまとめて見ると、次のようになる。

(Ⅰ) 常用するスワヒリ語の語源を確かめる：バントゥ語かアラブ語か。

(Ⅱ) この2種の語に対して、これと異なる語源の語を対照させる：アラブ語かバントゥ語か。

(Ⅲ) これらの常用スワヒリ語がバントゥ語と併用するか。

即ち： a) バントゥ語——バントゥ語

b) アラブ語——バントゥ語

の関係を調べる。

(Ⅳ) この二とおりの関係から、スワヒリ語が成立する過程で、バントゥ／スワヒリがアラブ語（文化）にどう対応したか、を分類する。

このような分析の手続きによってまとめたのが表5-2である。(Ⅰ～Ⅳ)欄は上の説明による。

表5-2： アラブ語(文化)に対するバントゥの対応

分類	： (Ⅰ)	： (Ⅱ)	： (Ⅲ)	： (Ⅳ)
	： 常用スワヒリ語の語源	： 対照する語	： バントゥ語の併用	： バントゥ／スワヒリの対応の型
0	： バントゥ語	： アラブ語 ： ○注1)	： ×	： 「取り替え」
	：	：	： ○	： 「使い分け」
1	： アラブ語	： バントゥ語 ： ×注2)	： ×	： 「付け足し」
2	：	：	：	：
3	：	： ○注3)	： ×	： 「乗り換え」
	：	：	：	：
4	：	： ○	： ○	： 「使い分け」
	：	：	：	：
5	：	： ×注2)	： ×	： 「穴埋め」
	：	：	：	：
	：	：	：	：

注1) 分類(0)のアラブ語(○)は、記載はあるがその用法は稀(特別)な語である。

注2) バントゥ語が「ない」ということは、F. Johnson (1939)になく、またもともとバントゥ諸語にも「ない」こと。しかし資料がなければ筆者の判断による。

注3) これはF. Johnson (1939)になくても、バントゥ諸語にあることを示す。

この分類の説明に付け加えて問題点を記しておく；

分類(0)：バントゥ語源のスワヒリ語である。この場合に見られる複数のバントゥ語の併用、と一つのバントゥ語の選択「使い分け」「取り替え」は本論の考察外であるが、「スワヒリ化」の問題として改めて考えたい。

分類(1)「付け足し」：これ以下が「バントゥのアラブ化」の対応である。バントゥ語になかった非バントゥ語を選択して取り入れ「付け足す」ことである。しかし筆者が「ない」と判断することに重要な問題がある。それは、F. Johnson (1939) に記載がないだけでなく、バントゥ諸語(バントゥ文化)の中に「ない」事を明らかにしなければ、「バントゥのアラブ化」の分析の手続きとして「ない」事を確かめたことにならない。本論では筆者の判断によって考察を進めた。

また、「ない」という判断には、別の分類(4)(5)がある。これは、前記(4, 4(3)：時の単位)で述べたように、アラブ文化との対応の際にバントゥ民の意識の中の連続性・非連続性が問題になる事であって、筆者はそれを「選択」と「発見」に区別して考えた。

即ち、分類(1)の「ない」：選択のレベル

分類(4)(5)の「ない」：発見のレベル

である。

分類(2)「乗り換え」：元々バントゥ語があったが、新しい非バントゥ語に「乗り換える」事である。ここでも又、「ある」と言う問題が「ない」という問題(前項)と同様、F. Johnson (1939) をこえてバントゥ諸語で確かめなければならないことにかかっている。これも資料がなければ、筆者の判断で考察を進めなければならない。幸い、本論で考察の対象になった語に関する限り、手元の資料でバントゥ諸語の確証が得られた。

分類(3)「使い分け」：現行スワヒリ語の中で、バントゥ語と非バントゥ語が併用される場合であるが、時と場合により「使い分ける」という考え方である。しかし本論で筆者はその「使い分け」の内容にはまだ立ち入って考えていない。

分類(4)「穴埋め」：「穴」はバントゥ語(概念)の中に認識のなかった空白である。その「穴」を自分の中に発見して非バントゥ語(文化)で埋めることである。

「認識のなかった」という判断は筆者の文化人類学的な判断にかかっている。

分類(5)「まとめ」：これも分類(4)と同様に、「認識のなかった空白」の問題であるが、「穴」ではなく「カテゴリー」というべきものである。「穴埋め」が内容の充実であるのに対して、「まとめ」は認識の整備である。

3) 上に述べた分析の手続きによる「バントゥの対応」を、数において調べて見よう。そこでもう少し詳しく見るために、現行スワヒリ語で常用される数(表5-1)に常用しないスワヒリ語を対照させて(表5-3)、「アラブ語に対するバントゥの対応」を分析してみた。[注：6 [tandatu] (和崎：1967) (ILCAA：1987, 1989) 以外は、総てF. Johnson (1939) に記載がある。] この表5-3で解る通り、対照する数がなかったのが、0と100~10億の併せて6語だけであることは、興味深い「対応」である、と筆者は考える。

表5-3: 現行スワヒリ語の「数」、バントゥ語とアラブ(非バントゥ)語の対照表。

語源は; バントゥ語(無印), アラブ・ヒンディ語(◆常用, ◇稀), 英語(●)。

◆tarakimu	: 現行スワヒリ語	: 稀・特別または常用
↑	:	: しないスワヒリ語
発見Ⅱ-	0: ◆sufri/◆sufuri	: x ⇨発見Ⅰ-④『穴埋め』
⑤『まとめ』	1: moja/(mosi)	: ◇wahedi
	2: mbili/(pili)	: ◇theneen
	3: tatu	: ◇thelatha
	4: nne	: ◇aroba
	5: tano	: ◇hamsa
	6: ◆sita	: tandatu ⇨選択Ⅱ-②『乗り換え』
	7: ◆saba	: fungati/pungati
	8: nane	: ◇themani
	9: ◆tisa/(kenda)	: kenda
	10: kumi	: ◇ashara
	11: kumi na moja	: ◇edashara
	12: kumi na mbili	: ◇thenashara
	13: kumi na tatu	: ◇thelatashara
	14: kumi na nne	: ◇arobataashara
	15: kumi na tano	: ◇hamtashara
	16: kumi na ◆sita	: ◇sitashara
	17: kumi na ◆saba	: ◇sabataashara
	18: kumi na nane	: ◇thematashara
	19: kumi na ◆tisa/(kenda)	: ◇tisataashara
	20: ◆ishirini	: makumi mawili ⇨選択-Ⅲ
	30: ◆thelathini	: makumi matatu ③『使い分け』
	40: ◆arobaini	: makumi manne
	50: ◆hamsini	: makumi matano
	60: ◆sitini	: makumi ◆sita
	70: ◆sabini	: makumi ◆saba
	80: ◆themanini	: makumi manane
	90: ◆tisini	: makumi ◆tisa
	100: ◆mia	: x ⇨選択Ⅰ-
	1,000: ◆elfu	: x ①『付け足し』
	100,000: ◆laki[Hindi]	: x
	1,000,000: ●milioni[Engl.]	: x
	1,000,000,000: ●bilioni[Engl.]	: x

⑤: [×]はバントゥ語にこの数の概念がなかったこと(筆者の判断)を示す。

この対照表(表5-3)によって、バントゥの対応を分類順にまとめ、問題点を挙げてみよう。
しかし、数に関する考えはまだ充分でない。

分類(0): この分類は本来、「アラブ語との対応」のない、バントゥ諸語の間の「取り替え」

や「使い分け」で、スワヒリ語が成立する過程を考察する問題が、鳥 [nswi--ndege], [tembo--ndovu] の場合に出て来たものである。そして、この問題は本論の考察の外にあるが、筆者は「スワヒリ化」の中で改めて考えることにしている。

しかし、バントゥの数 [1~19] (ただし6, 7, 9はアラブ語) に見られるアラブ語との対照について、この欄で考えを述べておくことにする。即ち、それらの数に見られるこの対照は、これまでの事例で見て来たものと違い、アラブ語との「使い分け」にはならない(ましてアラブ語からの「乗り換え」はない)と考えて、筆者は次のように考えておく。

基本的にスワヒリ語の数は、バントゥ諸語の「取り替え」である。一方で、この経過と独立して、アラブ語の数がスワヒリの中で特別な場面で使われて来た。その結果、1~10の基本数と11~19の数え方がスワヒリ語として成立し、それを軸としてアラブ(非バントゥ)語との対応が進んだ。言い換えれば、スワヒリ語の数はバントゥの数の構造を変えないで、アラブ(非バントゥ)語と対応している。[これが「スワヒリのバントゥ化」である、と筆者は考えておく。]

次に、本論で問題として来た「バントゥの対応」の形に触れる。

分類(1): 「付け足し」 100~10億。ここでは、この単位にバントゥ語がないと判断した。

分類(2): 「乗り換え」 6: tandatu から◆sita へ, 7: fungati から◆saba へ, 9: kendaから◆tisaへ(ただし進行中, あるいは「使い分け」)。何故この数だけアラブ語に「乗り換え」たのか、問題としておく。

分類(3): 「使い分け」 20: ◆ishirini と makumi mawili。

この「使い分け」は30~90でも同じである。ただし、日常生活ではアラブ語が一般であり、特に端数のついた数、例えば21は ◆ishirini na moja のように、アラブ語の単位を用いたバントゥ式表現である。

分類(4): 「穴埋め」 0 [◆sufri/sufuri]。

筆者は先に述べた対応の分類の考えによって、0は「発見」であり、「穴埋め」の対応である。

分類(5): 「まとめ」 数 [◆tarakimu] は数という「カテゴリー」の「発見」であり、この「まとめ」で、数という認識が整備・確立する。

これで、本論でとり挙げた事例1) 家・家財道具, 2) 動物名, 3) 身体名称, 4) 時, 5) 数について、バントゥのアラブ語(文化)に対する対応の分類(形態論)を終る。ここであらためて本論の主題とした、「バントゥのアラブ化」の考察の中で新たに出て来た「バントゥ諸語間の問題」の重要性を指摘しておく。

5. あとがき……問題の展望。

「スワヒリ化」の問題に取り組む筆者の中心課題は、「スワヒリ化」をサバンナの自己運動として捉えることである(和崎:1988)。その構想に続けて筆者は、本論で「サバンナの自己運動」の考察・分析の方法論を示し、具体的事例によってこの問題を明らかにするのが、本論の目的で

あった。しかし、本論で筆者はその目的を果していない。それは、「サバンナの自己運動」を構築するための手掛かりとした、「アラブ語（文化）にたいするバントゥの対応」の分類（形態論）の前半が済んだところであるからである。まえがき（1）で述べたように、本論に用意した事例「人・サバンナ・テンベア」の記述が出来なかったことと、今後取り上げる必要のある事例「行動・価値観に関する語」に問題を広げることが、本論をまとめるために欠かせない、と筆者は今判断している。そして、この形態論をまとめたうえで、筆者はこれを「アラブ文明の道具化過程」の例証の一つとして把え直して、そこから「サバンナの自己運動」を構築したいと考えている。

以上が、前論文（1988）から続けた全体の構想であるが、ここで本論の考察の中から幾つかの問題を取り上げて、問題の展望とする。

1) 考察の事例について。

ここで取り上げた考察の事例は、特にこれではなかった理由はない。これは、筆者が従来から続けている、日本語スワヒリ語辞典の構想の中で取り上げている「カテゴリー」の中で、手元に資料が揃い易いものという理由と、「物の名前」（家・家財道具、動物）だけでなく、一つの構造体である「身体名称」、及び抽象的概念として「時・数」を取り上げたのが、筆者の意図である。勿論これで、筆者は十分であるとは考えていない。これからの充実を図りたいと考えている。

2) サバンナ……テンベアの世界……に就いて。

筆者の掲げている「サバンナの自己運動」の考えの基礎には、（まだ曖昧な形でしかないが）サバンナの歴史性・文化性がある。サバンナを人の世界に組み込んだ世界のこととして、「スワヒリ化」を考えていこうとする姿勢である。その考えを述べるのが本論に続く後半であり、これが上に触れた「人・サバンナ・テンベア」である。

3) 対概念について。

対概念は、本稿では言及出来なかったが、筆者は興味ある問題であると考えて、今後の新しい考察の視点として取り上げたい。本稿でその問題点を窺わせたのは、「肉と血：nyama, ◆damu, 「寒暑：◆baridi, joto」の二例である。ここにその他の例を上げておこう。上下 [juu, chini], 前後（空間）[mbele, nyuma], 前後（時間）[◆kabila, ◆baada], 近遠 [◆karibu, mbali], うまい・まずい [◆-tamu, -chungu], 難易 [-gumu, ◆rahisi], (値) 安高 [◆rahisi, ◆ghali], 強弱 [-shupavu, ◆dhaifu] などが上げられる。このような事例を集めて、次に問題にしたい。

4) バントゥ語間の「取り替え」について。

これは、本論の主題とする「アラブ化」の外にある問題であるが、前章の終わりに述べたとおり、「スワヒリの成立」の中心課題と考えられるので、今後はこの点に留意して資料を用意し、考察を広げなければならないと考えている。

終わりに、筆者の方法論について、何故 F. Johnson (1935, 1939) だけを資料として取り上げるのか、と言う点について、繰り返し述べておきたい。筆者自身これだけで十分であるとは考えていない。F. Johnson の辞書以外に史書、辞典を渉猟しなければならないことは分かっているが、

しかし、筆者はその任でない。それならば、筆者がこれまでに、東アフリカのサバンナで作り上げたスワヒリ感覚と、スワヒリ・日本語辞典編集のために繰り返し通読して全体を把握している F. Johnson (1935, 1939) によることが、筆者の取り得る次善の科学的手段(資料の一貫性)であると考えたからである。

参考文献

- 日野舜也(1980) 東アフリカにおけるスワヒリ認識の地域的構造『富川盛道編：アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語—』pp.173-225
- ILCAA*(1987) *Bantu Vocabulary Series: I*
- No.1. Yukawa, Y. A Classified Vocabulary of the Mwenyi Language.
 - No.2. do. A Classified Vocabulary of the Nkoya Language.
 - No.3. Kagaya, Ry. A Classified Vocabulary of the Lungu Language.
 - No.4. do. A Classified Vocabulary of the Lenje Language.
- ILCAA(1989) *Bantu Vocabulary Series: I*
- No.5. Yukawa, Y. A Classified Vocabulary of the Nilamba Language.
 - No.6. Kagaya, Ry. A Classified Vocabulary of the Pare Language.
- Johnson, F. (1935) (printed in 1965) *Kamusi ya Kiswahili*.
- do. (1939 a) (printed in 1959) *A Standard Swahili-English Dictionary*. Oxf. Univ. Press.
 - do. (1939 b) (printed in 1960) *A Standard English-Swahili Dictionary*. Oxf. Univ. Press.
- 川田順造(1987) 文化領域『川田順造編：黒人アフリカの歴史世界』pp.92-124.
- Krapf, Dr. L. (1882) (reprinted in 1964) *A Dictionary of the Swahili Language*. London.
- Madan, A. C. (1906, revised and enlarged by) (Steere, E. 1870) *A Handbook of the Swahili Language*.
- Maimu, M. (1982 a) *Kamusi Ya Ndege wa Tanzania*.
- do. (1982 b) *Kamusi ya Wanyama na Nyoka wa Tanzania*.
- 三木 亘(1984) 世界のなかのイスラム世界『三木 亘他編：イスラム世界の人びと』I (総編), pp.1-92.
- 日本イスラム協会・島田襄平・板垣雄三・佐藤次高編(1982)『イスラム事典』。
- Rechenback, Ch. W. (1967) *Swahili-English Dictionary*. The Catholic Univ. of America.
- TAUKI** (1981) *Kamusi ya Kiswahili Sanifu*.
- 和崎洋一(1967) 東アフリカ・部族語対訳(No.1), スワヒリ語・イランバ語・スクマ語『天理大学アフリカ研究会, アフリカ』1, pp.86-104。
- Wazaki, Yoichi (1980) *Kamusi ya Kiswahili-Kijapani*. (スワヒリ語日本語辞典)
- do. (1985 a) (in Kiswahili) 東アフリカの分類鳥名表。(Y. Wazaki ed.) *Multi-lingualism and Swahilization in Swahili Speaking Area*, pp.1-55.
 - do. (1985 b) (in Kiswahili) How to Name the Birds By Kiswahili. (Y. Wazaki ed.) *Multi-lingualism and Swahilization in Swahili Speaking Area*, pp.57-88.
- 和崎洋一(1986) 東アフリカの鳥名―「スワヒリ化」過程の一考察。『富山大学人文学部紀要』10, pp.93-121。
- 〳 (1988) 「スワヒリ化」―サバンナの自己運動―。『中部大学国際関係学部紀要』No.4, pp.31-43.
 - 〳 (1990, 印刷中) 「スワヒリ化」―異文化(特にアラブ文化)に対するバントゥの対応について―。『アフリカ研究』35.

(注:*)ILCAA: Institute for the study of Languages and Cultures of Asia and Africa. (東京外国語大学, アジアアフリカ言語文化研究所)

(注:**)TAUKI: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu Cha D-Salaam. (ダルエスサラーム大学, スワヒリ語研究所)